

『クリーン・クリーン』

柘榴木 昂(ざくろぼく すばる)

9,999 文字

あらすじ

マルガリータこと角田鋭士郎は清掃会社の平社員。そしてクイーン・オブ・クリーンこと鈴ノ音凜佳は清掃現場で水着になるちょっと変わった、でも憧れの上司だ。二人は取引先から渡された一本の歯ブラシから最近多発している窃盗事件の解明に挑むことに。

この世で最も美しい場所はどこか。京都の四季折々の庭園か。壮大な富士がそびえる湖のほとりか。否。最も美しい場所。それは彼女がカフェ・カプチーノをすすする、その背中に広がる景色である。

仕事を終えた彼女の背中には、まばゆく光るオフィスが広がっていた。ただの中小企業の仕事場が、まるで高級リゾートホテルのロイヤルスイートルームばりに輝くのだ。彼女は汚く散らかった現場を美しく磨き洗練されたデザインに『ケア&メンテナンス』すること。人呼んで「必殺掃除人」「クイーンオブクリーン」「抗菌レディ」こと鈴ノ音凜佳その人である。

良いですか――

研修時代、すでに主任であった鈴ノ音主任の言葉を思い出す。

「本当のキレイっていうのは輝いていたり、新品のものを指すのではありません。汚れていないこと、散らかっていないこと、ほったらかしていないことを意味します。築五十年のなんてことない民家だって、ちゃんと手入れしてればキレイなんです」

主任が示す指の先には木造の住宅がリメイクされて古民家カフェに様変わりしたパンフレットがあった。ウチのクリーン部と再開発事業部が請け負った仕事の一つだ。

だが僕は知っている。キレイには、もう一つ意味がある。

「さて、いきましょ。次の現場が待っています」

キレイな声で回想から戻る。空の紙コップを最後のゴミ袋に入れて口を縛る。その紙コップを何度後で回収しようと考えたことか。

主任はバツと上着を肩にかける。素肌の肩に。そう、キレイとは素直に「惹きつける」という意味だ。主任のまぶしく輝く白いビキニスタイル。文字通り、何を隠そう鈴ノ音主任はクリーン業務中水着になるという職業癖(?)があった。だがその見事なプロポーションと仕事っぷりからリピーターは絶えない。女性達にも的確な「キレイになるアドバイス」をプレゼンしていく。

僕はゴミを担ぐと先に扉を開けた。最後に現場を出るのは主任でなくてはならない。余韻すら美しく。それがわが「株式会社リーン・クリーン」のモットーなのだ。水着姿で堂々とオフィスを歩くのが似合うのなんて主任くらいのもんだらう。

先輩がドアを閉める。盗難に合い、竜巻でも発生したのかと思われたぐっちゃくちゃだった事務所の中も、こうして今や日常を取り戻した。いやそれ以上に心機一転の陰りなききっかけとなるだらう。

先輩がワゴン車の中でサンダルからヒールに履き替え、服を着る。もちろんその間にあらわれる、作業が終わった現場の男性からの、「プレゼント渡しといて下さい攻撃」に対応するのは付き添った男性職員の仕事だ。今日も先輩へのプレゼントが果敢に行われる。ベタなものでは花束、テディベア、指輪なんかも登場する。株券や高級外車の鍵が渡されたこともあった。もちろんすべてお断りだ。むしろ一番厄介な仕事と言っている。アイドルのマネージャーじゃねえんだぞ、と思いながらすべてことわる。

「おい兄ちゃん、あんたじゃなくて凜佳ちゃんに用事があるんだよ」

昔ながらの中小企業はこういう典型的な傲慢役員もいる。偉そうで厭味っらしい、自分が何よりも偉いんだって感じの。短い手指で赤いリボンのかかった箱をずいと突き出し凄みを利かせてきた。おおかたえぐい下着でも包まれてるんだろこのタコスケめ。この手の顧客にももちろん対応しなくてはならない。必殺の決めゼリフを放つ。

「あまり無理なことを言うと、次から鈴ノ音主任はこの現場に来ませんよ」

これで相手は手を引く。ふん。しよせんお前なぞ眼中にない。鈴ノ音主任が見つめるのはお前のような綺麗にならない汚れではない。拭いて輝き磨いて光り、ワックスでつや出る現場だけなのだ。

「準備できましたー。動いていいですよー」

ワゴンの中から声がした。まあ、もちろん僕も相手にされてないだろうな。助手席にも来ないからな。

発芽した虚しさを噛み殺しつつ、では、とお辞儀して車に乗り込む。だがギアをニュートラルに入れようとしたその時、あの、と声を掛けられた。

「すみません、主任への贈り物などは一切お断りさせて……」

「違うんです。その、あなたにです」

「……え？」

みればメガネをかけた可愛らしい事務員さんが、僕を見上げているではないか。まいったなあ、僕には心に決めた水着の似合う上司がいるんだけど、でもまあしょうがないか恋心は誰にも抑えられないもんね。

「ええ、ええとそのあの、ぼぼぼくに、ですかそのこういうのも困るのかなどうしよう」

「はあ？ 勘違いしないでください。変態メンズ共じゃあるまいし。プレゼントなもんですか。あなたのでしょうか、これ」

「はひ？ これは」

間拔けな声で受け取ったそれは、黒ずんだ歯ブラシだった。確かに細かい溝などを磨くのに使うことはある。だが今回は使っていない気がする。作業着に入れっぱなしだったのかな。いや、鈴ノ音主任と仕事するときは全部一からきっちりチェックする。あるべきところにあるべきものを。胸に刺すボールペンから清掃ワゴンに並べる洗剤の種類と量まできっちり量って整列させる。この歯ブラシは僕のではない。じゃあ主任だろうか。細かい掃除もするにはするが、基本的に主任は指示とチェックを受け持つ。とはいえ輸入食料品の卸し業者のフロアに落ちてるものでもないだろう。となるとほかのスタッフだろうか。

「それをどこで拾われたんですか？」

主任が窓をスライドさせて顔を出した。髪を結びなおして可愛らしさも仕切り直した。周り込んでくる男性役員を制しながら事務員さんが答える。

「あっ鈴ノ音さん。これ、あそこの窓の下で拾ったんです」

一階の角を指す。廊下の採光用の、いわゆる普通の窓だ。

「窓の下、ですか。ありがとうございます。きっと私たちの誰かですね。すみません」

「いえいえ」

鈴ノ音主任が歯ブラシを受け取った。にっこり笑う事務さんがキレイだった。人はキレイに対峙するとキレイになるのだろう。

車を出してしばらくすると、主任が歯ブラシを眺めているのがミラーに映った。

「それ、誰のでしょうねー」

「……え？ ああ、これね。ねえ丸刈りくん」

主任は僕のことを丸刈りくんと呼ぶ。見たまんまだ。あまり男性職員の名前を覚えない人だった。ちなみに僕の本名は角田鋭士郎。全然丸くなかった。

「なんですか、主任。心当たりでもあるんですか？」

「それがね、まったくないの」

「まったくですか」

「うん。今日のスタッフの歯ブラシは多分全部把握してる……というか、この歯ブラシはウチが持たせてるアイテムじゃないのよね」

主任は掃除道具をアイテムと呼んでいた。いわく、キレイは魔法なのだ。モノがよみがえり周りの人たちを明るくさせる。そんなきれいにする道具たちはマジックアイテムに等しいらしい。

「それに、ヘンな匂いがするの」

「匂いですか」

「そう。さっきの現場で歯ブラシ使うのって窓のサッシくらいだと思うの」

「そうか。窓のサッシに洗剤は使わないですもんね」

窓のサッシは土ぼこりがほとんどなので払って拭きとるのが常だ。せいぜい使ってもうすめた塩素で拭くくらい。別料金で高圧洗浄したりもするが、基本的にサッシの部分に洗剤は使わない。濡れると余計に土が粘土みたいに固まって取りにくくなるのだ。

「この匂い……なにかしら」

主任が深刻そうな顔をしている。掃除職人の気質なのだろうか。

「次の現場も確か、盗難にあったところよね」

「ええ。今日はほかのチームもそれで現場が埋まってますよ。この辺の地区だけでも三件。同様の手口らしいですし、窃盗グループが跋扈してるって話です」

「同様の手口って？」

「その、警備員がちょうどいないときとか、警報やカメラの死角をついてくるんです」

「そんなことできるのかしら。桃山商事さん、入口にサコムシール貼ってあったけど」

サコムは大手の警備会社だ。

「さあ……でも次のイーシヨクさんも現にやられちゃってますもんね。あそこもサコムしてましたよ確か」

「そっか。それでも侵入されちゃうなんて、むしろ誰か身内が招き入れてるってそれぞれ企業は思うかもしれないわね。なおのこと刑事告訴して犯人が身内だったらイメージ悪くなるかもって躊躇しちゃうかも」

「それが狙いかもしいんですよ。実際被害額は大体 30 万程度らしいんです」

情報は受付のマリコちゃんからだが、そこは言わなかった。

「……被害が少なければ大事になりにくいって考えてるんでしょうね。これだけ続いたらさすがに事件として警察も動くでしょうけど、たしかに告訴する金額じゃないわ。薄利多盗ってことかな」

「でも、おかげでウチは大忙しですね。まあ不謹慎ですけど」

僕の言葉には反応せず、歯ブラシを見つめている。

「主任、もうすぐ着きますけど先に食事にしますか。先に挨拶だけ入れますか」

「そうね……あっ」

あたりのランチどころを思い浮かべながら信号で止まる。

「どうしました」

「この現場、水着がこないだと同じの着てきちゃったなって。ごはんの前に、着替えるわ」

「んえ？ きき、着替えるってみみみ水着をですか？」

いくらワゴンの中が掃除道具で見えにくいとはいえ、ガラスにスモークなどが張ってあ

るわけではない。水着の上から服を着るのとは違い、水着から水着に着替えるとなると……。

「い、いくらなんでもそれはダメですよ。いや、すごくイイっ。じゃなくてやっぱその、何ていうかイイけどダメですっ」

「別に女子トイレ借りて着替えるつもりだけど」

「そーですよ！ だーと思った！ いやあ次の水着も楽しみですなあ！」

「楽しみねえ。まあ水着で仕事するの好きだけど。そんなに見たいの？」

……ああ、お母さん。

男なら、部下ならどう答えるのが正解なのでしょう。男子として淡い恋心に従い自ずから屹立せし衝動に正直に進むべきか。理性を総動員し職業文化人としての矜持を保ち奥歯噛みしめて裾をただすべきか。

ああ、すげー見たいです！ お願いですそのすべすべお肌を眼前にお披露目くださいと叫びたい反面、いや！ 仕事である以上鼻の下を伸ばしている場合じゃありませんからと答える方が男らしいわ、好き！ とかって展開になったりしませんかね？ でも男らしさならそのまま素直に押忍！ 見たいっす！ って言った方が正しいか！ いやでも己に厳しく仕事に芯があったほうがイイ男でしょうかー？！

ぷっぷー。後ろの車からクラクションが鳴る。

「すみませんどっちですかね！」

訳の分からないことを言いながら慌ててアクセルを踏み込む。主任が後ろで転がった。

「ちょっとおー、急発進は事故のもとよお！」

「はひ、すみませんっ！」

結局先に挨拶して食事になることになった。が、おでこにバンソーコーを貼った主任はふくれっ面だ。

「本当にすみません、鈴ノ音主任の御尊顔に傷がつくなんて小生腹切ってお詫びします」

「お詫びはいーわよ。その分しっかり働いてもらうから」

しかし動揺を誘うような質問をしてくる主任にも非はある、とは言えなかった。そもそもなんで水着になるのかとも聞けない。いわく、聞けば怖ろしい答えが返ってくるらしい。

「お世話になります。クリーンクリーンの鈴ノ音です」

古びて少し暗い受付で挨拶する。中年の女性が立ち上がって頭を下げながら笑顔で近づく。総務で担当の安土さんだ。

「鈴ノ音さんが来てくれたのね！ 今日水着姿楽しみにしてるわあ」

案外女性にも人気らしい。いつも通り片づけする部署を案内される。今日はツーフロアだけだった。片づけとゴミ捨て、それにワックスがけと細かい清掃がパックになった基本プランだ。ワックスチームが後で合流することになっている。僕は主任に荷物もちでくっついていだけで、作業のプランニングも打ち合わせもほとんど鈴ノ音主任が行う。

「そういえばイーショックさんも大変でしたね。なんだか泥棒が入ったって聞きましたけど」

「そーなの！ 聞いてよ鈴ちゃん、うちらが疑われたのよ」

「ええっ。それはどういうことなんですか」

わざとらしく先輩が驚いて返す。あながち車の中で話したことは的を得ていたようで、

身内に手引きした可能も否定できないと緊急の社内報が打たれたらしい。

「確かにねー、侵入経路も何もわからないんですって。だからって社内をそんな、いきなり疑う？ それも事務所にいった後があるとかで、私達個別に取り調べみたいに呼ばれたのよ。やんなっちゃうわ」

「あらあら、大変でしたね。何を盗まれたんです？」

「それが車のカーナビなのよ。金庫は手つかずで、事務室から車のキーだけ抜き取られてまた返されたの。被害がそんなもんだから刑事告訴もしないって」

その辺も読み通りだ。確かに金目の物を狙わずに事務所を往復するなんてリスクが大きいことを普通の泥棒ならしないだろう。ただ、今回はさっきの桃山商事のように荒らされた形跡もないため同一犯かはわからないと思った。

その後の安土さんの愚痴は男性社員やら三人の息子に移り、最終的に今度きたらピーマンを山ほど貰う話になっていた。主任も男性からのプレゼントは断るが女性からの野菜はもらうらしい。

「じゃあ安土さん、いつも通りの流れでやりますね。あと、女子トイレお借りできますか」

「はいはい。そこの正面受付から右に曲がったところにあるわよ。そこのぼっちゃんが覗かないように見張ってようか」

「んのかな、覗かないですよ」

「ふふ。先にご飯食べに行行って。私はいいから」

それだけ言うと主任はトイレの方に向かった。基本的に弁当持参の主任は一人で車の中で食事をする。といってもいつも野菜スティックやドライフルーツだ。一緒に車の中で食事しようとしても音楽を聴きながら完全に一人モードに入るのが常だ。気の利く僕はだから外に出て時間をつぶす。

食事から戻ってくると鈴ノ音主任と、他に何人かスタッフが集まっていた。ウチは女性の現場スタッフも多い。鈴ノ音先輩の周りを囲んでいた。同期の水尾さんが僕を指さす。

「あ。角田君だ。いいなあ凛佳先輩と現場組めて。私なんて凛佳先輩がいるからわざわざ家から遠い方に応援に来たのに」

大体大掛かりな現場を先に入れて、午後から分散して次の現場に入る。監督以外は遅くなったときに直帰もできるので、午後現場は自宅や駅に近いところを選ぶスタッフが多い。

「僕の名前が今出たんだろ。話題に出ない程度にしか相手にされてないさ」

「まああんたなんて相手にされないでしょ。ねー先輩」

「そ、そんなことないわよ。それに今からの現場はマルガリータ君に監督してもらおうと思ってるし」

「え。マルガリータが監督？ どーしたんですか凛佳先輩」

「おいマルガリータに便乗すんな。でも主任、なんで僕なんですか」

「私、ちょっと用事が出来て社に戻ることになったの。水尾さんたちの軽車で帰るから、遅くなったら送ってあげてね」

「えー、先輩すぐいっちゃうんですかあ。水着楽しみにしてたのに」

水尾が口をとがらせる。水着については僕も同感だ。でも僕も監督なんて初めてだし水尾たちに指示出すのもくすぐったい気がする。というか、情けないけど言うこと聞いて

くれなさそうだ。

「まあここなら何度もやってるし、水尾さんたちも慣れてるから大丈夫よ。終了印もらうの忘れないでね。完了報告は一応、終了印の前に電話して。みんな、マルガリータくんのサポートよろしくね」

「はあい。マルガリータじゃ頼りないけど、先輩がそういうなら頑張ります」

「おい」

「じゃ、よろしくね」

「はい」

かくして僕がリーダーシップをいかんなく発揮したイーシヨクさんの現場は、全力で空回った僕のサポートにみんな忙しかった。関係ない部屋を掃除したりワックスをひっくり返したり依頼主の対応に声が裏返ったりしたが、自信を喪失する以外は予定通り無事に終わった。

「絶対凜佳先輩だったらあと二時間は早く終わったわ。角田、借りだからね」

「勘弁してくれよ。ただでさえ鈴ノ音主任の水着姿が無くて視線が痛いのに。半額にしろって言われたよ。次も来ないのか、とか」

もはや掃除と水着、どっちで料金が発生してるかわからなかった。この社長も典型的なワンマンで、依頼料は値切るくせに社長室には日本刀とか西洋の鎧なんぞを飾ってる悪趣味な奴だった。

「ま、監督なんてまだ早いってことね。ほら、さっさと社に完報入れなさいよ」

「はいはい」

備品の携帯で連絡する。完報です、と告げるとマリコちゃんが鈴ノ音主任につないでくれた。

「主任、お疲れ様です完了報告です」

いくつか注意点と忘れ物を指摘されるも奇蹟的にクリアしてそうだった。まあ30回くらい確認したからな。

「お疲れ様。結構かかったみたいね。ところでマルガリータ君、今日この後用事ある？ 付き合っほしいところがあるの」

……？ 少し声が控えめになった。そのせいか聞き取れなかった。いや、正確には言ってることはわかるのだがよく理解できない。

「へ？ へへえ？」

「へんな声出さないの。予定があるなら無理にとは言わないんだけど」

「んな、んなんですと？」

「だから今夜空いてる？ 急だし無理かな」

「いえそんな！ 不詳マルガリータ、命に代えても今夜でもなんでも捧げますです！」

「だから、へんな事言わないのっ。あと、他のスタッフには内緒にしておいてね」

これは。お母さん奇蹟って起きるんですね。告白も、受験も就活もじゃんけんすら勝てないだった僕だけど、今日この瞬間のためにすべての試練はあったのですね。

その後先輩が待ち合わせ場所と提案して無二もなく快諾した。緊張とは裏腹に顔が浮かび上がりそうなくらいにやける。

「角田、完報終わったー？」

「はひゅん！ うお、終わったよほっ！」

「なに声裏返ってんのよ。どうせ怒られてんでしょ。まあ凜佳先輩に怒られるならご褒美

でしょうけど」

ふへへ、怒られる？ 何言ってんだい今夜はなあ……と言いかけて言葉と表情を飲み込む。勤めて冷静に振舞うのは今日一番しんどいことだった。

社に戻るも鈴ノ音主任の姿は無く、先に待ち合わせ場所に行っているようだった。僕は急いでシャワーを浴びて着替えてコンビニでデオラントスプレー買った。カップルがお泊りセットのコーナーであれこれシャンプーどっちがいいとかっていちやついていた。

まあいい許そう。そして僕も今夜は。

いや。初めてのデートでそこまで考えてはいけない。

デートだって。もうっ。

くねくねしているとカップルに怪訝な顔されたのでとりあえずスプレー振りまいて誤魔化した。

主任が指定した待ち合わせは駅の裏口だ。小さい駅ではないが裏口は駐車スペースばかりで飲食店はおろか人通りも少ない。

「あ、早かったね」

「しゅに……ん？」

手を振る主任は黒装束だった。くのいちみたいな。しかももたれかかっている車には見たことのある羽ばたくトリのようなエンブレム。

「こ……これ、ロールスロイスなんですかもしかして」

しかもでかい。形こそ長細くはないが、やはりロールスロイスだった。ドラマとかで大企業の社長が乗ってる奴の親戚だ。

「そーよ。今動かせる黒い車これしかなくて。さ、乗って」

恐る恐る乗り込む。中は意外にもコバルトブルーに配色されていた。震える手でシートベルトを締めると音もなく車が滑り出した。ほとんど無音だ。

「ちょっと大きいけど、ゴーストの名の通り静かでいいでしょ」

ロールスロイス・ゴースト。聞いたことしかないし現物お目にかかったこともないが、少なくともこの辺の土地付き一軒家に相当する値段のはずだ。

「これなら今夜のミッションに打ってつけかなって」

「な、なんでこんな高級車……ミッション？」

「そう。ミッションよ。あ、お腹すいたならその辺の袋から好きなもの食べて。おごりよ」

その辺の袋の中はコンビニおにぎりやらサンドイッチやらサラダやらだった。コーヒーもある。ロールスロイスの中でコンビニおにぎり食べるなんてコンビニグループの総帥くらいだろうな。

「ごめんね、好き嫌いとか知らなかったから適当で」

「あ、いえ……その、これからどちらへ？」

「これよ。これを返しに行くの」

差し出した主任の手には黒ずんだ歯ブラシがあった。

「これを？ 持ち主が分かったんですか」

こくりと主任が頷く。

そして到着したのは以前現場でもお世話になった医療品メーカーの営業所が入って

いるビルだった。10階建てと大きいけど、お得意様の営業所は6階のワンフロアを占めるのみ。

「ここですか？ イリヤ医療営業所」

裏口から少し離れたところに車を止めて静かにドアを開める。物言わぬ夜の壁に沿うように、無言で近づいていく。

黒装束の主任は動きも忍者みたいだった。後ろからこそこそ付いていく白いカッターシャツの僕が全部台無しにしてる気もするけど。

一階の窓を一つずつ開くか確認しているらしい。トイレの少し高くなっている窓に手をかけたとき、「あっ」と思わず声が出てしまった。主任がすぐに僕の口を押さえる。やわらかくていい匂いがした。主任が顔を近づける。

「いいこと、マルガリータくん。すぐに警察に連絡して。不審者が侵入してますって」

それだけ言うと薄く開いた窓を全開にして主任が軽々と壁を蹴り中に侵入した。僕も背伸びして窓枠にしがみつく。警察に連絡しろと言われても、どうしたって不審者は黒づくめの鈴ノ音主任だろう。それに本当に賊が侵入してるなら主任一人じゃ心配だ。

何とか窓に手をかけ壁をよじ登りトイレの中に落ちるように着地した。先輩の姿はすでない。暗さにはすでに目が馴れていた。個室が二つの小さなトイレだった。トイレから駆けだすと、ドアを出たところで「ヒッ」と声が出た。

「……もう、丸刈りくん。騒がしいわよ」

「えあ？ 主任。すいませ……山田さん」

懐中電灯で照らされた円に見知った顔が捉えられていた。先の短い叫び声も山田さんのようだ。ウチのパート職員で掃除係の山田さん。定年後週三日で色んな施設の掃除に入っている。

「あれ？ この現場、山田さん担当だっけ。いやそんなことは今はどうでもいい。逃げた方がいいよ、不審者が侵入してるかもしれないんだ」

「それは山田さんに聞けばわかるわ」

主任が覆面を外して真顔で言った。懐から例の歯ブラシを取り出す。

「ねえ山田さん。これ、イーショクさんの社長室にある銀の甲冑に使ったでしょう。硫黄の匂いが残ってる。シルバークリーナーの酸化剤が硫化銀被膜を分解したときの匂い。シルバークリーナーを使う現場はこのへんじゃあイーショクさんだけだもの」

「鈴ノ音さん……」同時に山田さんがうなだれる。

「ウチの派遣掃除パートさんに、イーショクさんと桃山商事さんを兼ねてるパートさんはいなかったわ。山田さん。桃山商事さんの社長室で使った歯ブラシがなぜイーショクさんの窓の下にあったのか、そして時間外で管轄外のイリヤ医療さんのところになぜあなたがいるのか説明できますか」

山田さんはうつむいたままだった。どうやら泥棒グループを手引きしていたのは各企業に出入りしてる、我がリーン・クリーンの掃除パートさんだったらしい。もちろん実行グループもほかにいるはずだ。その時、通路の電気が一斉に点灯した。

「角田！」

「水尾？ みんなも……何やってる！」

廊下の突き当りを曲がってきたのは昼間一緒に働いた、清掃チームのみんなだった。

「なにやってるもなにも、山田さんから相談受けてほら、この通り」

屈強な清掃チームに引っ張られてきたのは知っている作業着だった。ウチのライバル会社だ。

「こいつら、ウチのお得意様を荒らして回ってたんですよ。で、後からウチが窃盗団を囲ってるって噂流すつもりだったんです。お嬢様、どうします？」

ぴかぴかの通路に転がされた窃盗団は泣きそうになりながら主任を見ていた。

「お嬢様？」

急な展開についていけない。水尾が慌てて口をつぐんだ。

「どういう事なんです？ 主任？」

すりと黒装束を脱ぎ捨てる。中にはやっぱり、白い水着姿。胸のところに見たことあるデザインの細工がしてあった。xを柔らかくしたような金色のエンブレム。世界を代表するハイブランド、ブルネルだ。

「ブルネルのメインデザイナー、マーガレット・ブルネルの娘で株式会社リーン・クリーン筆頭株主鈴ノ音凜佳です」

おお美しい。きらめく白に滑らかなボディライン。

そして、と水尾が続ける。

「世の中の濁った悪をクリーンに。あらゆる汚れをキレイに洗浄、リーン・クリーナーズ！」

びしっと決める。ポーズの練習もしてあったらしい。

「でもお嬢様。マルガリータは何も知らないみたいですけど、もしかしてメンバーに加えるおつもりですか？」

主任こと事実上の組織のトップである鈴ノ音凜佳嬢がこくりと頷く。

「この人は決して私を裏切らない。『キレイ』をわかっている人だわ」

「ま、お嬢様がそうおっしゃるならいいですけど。でも私より下っ端だからね」

水尾が指をさす。僕は頷いていた。勢いかもしれない。でも多分僕はこの人たちのことが好きになるだろう。キレイな場所とは、たぶんそういうところなのだ。